

相馬 兎二（そうま・とじ）

1、プロフィール

俳人。高松玉麗の松濤社に創立同人として参加。「寂光」創刊、維持同人として積極的に寄与。昭和 34 年青森俳句会「暖鳥」に同人として加わる。昭和 55 年暖鳥賞受賞。

<生没>

1903(明治 36)年3月9日～1994(平成6)年3月 25 日

<代表作>

句集『蟻の列』(暖鳥文庫4)

<青森との関わり>

藤田鉱業株式会社青森電煉所に入社。職場に俳句会があり、若紫の号で参加。続けて天位に入り自身と励みを覚える。

2、作家解説

明治 36 年3月9日、青森市松森町2番地に父、相馬春吉、母かすの三男として生まれる。本名春治(はるじ)。兄二人夭逝、弟妹各一人。明治 42 年3月浦町尋常小学校に入学。大正4年浦町尋常高等小学校に入学、担任金芳麿がクラス全員に「凧」(いかのぼり)の題で俳句をつくらせた。春治の「清正も頼光もいるなりいかのぼり」など五句とも佳作としてあげられた。俳句への芽生えがしずかに湧きはじめていた。

卒業の頃、第一次世界大戦の軍需産業は活気を帯び、藤田鉱業株式会社に就職、職場の俳句会に若紫の号で参加、句会で二度も続けて天位に入り、自信と励みを覚える。また機関誌「かりがね」に投稿、上司に菊地柁次郎がおり、短歌の指導も受ける。大正8年ベルサイユ講和条約と共に藤田鉱業も縮小閉鎖、やがて青森電燈会社に移る。11 年頃には野呂冬山らの川柳吟社に入り、「うさぎ」

の号で川柳もはじめる。淡谷悠蔵らの「黎明」に短歌を投稿、「兎二」の筆名をはじめて使う。ほぼ8年ほどで俳句以外は止め、一筋の道となる。

大正 13 年 10 月高松玉麗の松濤社に創立同人として参加。14 年9月、結社句集『おぼろ』、15 年9月『海丹』、昭和2年 11 月『茄子籠』、3年 10 月『ゆきのした』刊行、年刊句集の前駆となる。5年4月「寂光」創刊以来毎月投句を続け、社業としての県句集発刊に参画した。昭和2年結婚、一男四女の子宝に恵まれるが二女が女学校卒業後急逝する。15 年五所川原営業所に転勤、終戦前の豪雪の時母が長逝。24 年長女正子が小林正三郎に嫁す。

退職後は俳句に専念、県俳句大会に二年連続天位獲得、34 年頃より青森俳句会の「暖鳥」に参加。55 年7月、年度暖鳥賞受賞、56 年度暖鳥4月号に特別作品3句、同年7月、暖鳥創刊 35 周年記念俳句大会で最高位となる。「片陰にをりて此の世に用残る」63 年句集『蟻の列』を暖鳥文庫4として刊行。平成6年3月25 日逝去。享年 91。

3、資料紹介

○相馬 兎二句集『蟻の列』(暖鳥文庫4)

図書

1988(昭和 63)年3月1日

177 mm × 123 mm

兎二俳句に魅かれる人の声を受け、青森俳句会が暖鳥文庫として刊行。同人の津川あいがまとめ、1600 句の暖鳥発表句より新谷ひろし氏が 328 句を選んだ。